

公文書に「障碍」表記へ

宝塚市 全国初、障害者施策など

障害者施策などに関する公文書について、兵庫県宝塚市は4月から「障碍」の文字を使わず「障壁」と表記する方針を決めた。災害や害悪など「害」に否定的なイメージがあり、障害者の中に不快に思う人がいるというのが理由。市によると、公的に「碍」を使う自治体は全国初という。

文化審議会国語分科会は昨年11月、相応の審議が必要」として結論を先送りしたが、「地方公共団体や民間の組織が『碍』を使うことを妨げるものではない」との考えを示していた。

宝塚市はこれまでホームページや広報資料では「障がい」と平仮名交じりで表記してきた。この見解を受け、市内の障害者の関係団

体の意見を聞いた結果、おむね異議はなく、表記を改める方針を決めた。今月15日に開会する市議会で、中川智子市長が「障碍」の使用を表明する見通し。今後、法律や固有名詞などを除き、市の判断で表記を変えられる公文書や広報誌などに適用していく。当面は文字にルビをふって周知をはかるといふ。

(太田康夫)

法律や公文書で使う漢字は常用漢字表が基準になっており、妨げるという意味がある「碍」の字は含まれていない。だが、2020年の東京パラリンピックを見据え、衆参両院の委員会が昨年、法律で「障碍」と表記できるように常用漢字表に「碍」を加えることを求める決議をした。常用漢字について話し合

子宮頸がん 2000年ごろから増加

子宮頸がんの患者数が2000年ごろから増えているとする研究結果を、大阪大などのチームがまとめた。治療が効きにくいタイプの子宮頸がんも、若い世代で増えているという。阪大の上田豊講師(産婦人科)らは、1976〜2012年の大阪府がん登録データを使い、約2万5千人の子宮頸がんの患者について、高齢化による影響を調整したうえで分析した。人口10万人あたりの罹患率

大阪大など調査

原因はつきりせず

は、1976年は28・0人だったが、減少傾向となり、00年は9・1人になった。がん検診が普及し、がんの前段階で見つかった治療する人が増えたことなどが原因として考えられるという。しかし、00年以降は増加に転じ、12年は14・1人になった。性交渉の低年齢化などを指摘する声もあるが、原因ははっきりしないという。子宮頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)が原因となることがわかった。最も多いタイプは、HPV16型によるものだが、HPV18型も増加傾向にある。HPV16型は、最も多く見られるタイプで、がんの原因となる。HPV18型は、HPV16型に次いで多く見られるタイプで、がんの原因となる。HPV16型は、最も多く見られるタイプで、がんの原因となる。HPV18型は、HPV16型に次いで多く見られるタイプで、がんの原因となる。